

無料

ご自由にお持ち
帰り下さい

平和で豊かな沖縄県を目指す情報誌

沖縄協会だより

2020.9

No.17



平和の絵―「戦争と平和」

20点連作―第19作

西村計雄 作

ニライの海

300号

176×306×6.5cm



〈制作意図〉 太陽の光をすべて吸い込んでエメラルド・グリーンに輝く沖縄の海。その透明な流れに育まれた豊かな海には、色彩あざやかなサンゴが息づき、熱帯魚が群れる。この平和で美しい海の彼方に、人々は限りないロマンをかきたて、幸いをもたらす楽土のあることを信じ、いつの頃からかニライカナイと呼び、生活に深く根ざした海をこよなく愛し、敬っている。

(昭和60年6月6日寄贈)

西村計雄(明治42年・北海道生まれ)

東京美術学校卒、藤島武二に師事。1943年文展(現・日展)特選。戦後早稲田中学校と高等学校の教師を勤め、51年に42歳で単身渡仏する。ピカソの画商カーンワイラー氏との出会いを契機に、53年よりパリを中心にヨーロッパ各地で個展を開催。その作品は、フランス国立近代美術館やパリ市美術館に買い上げとなった。フランス芸術文化勲章、共和町立西村計雄記念美術館開館。

2000年12月4日没。

沖縄協会は、沖縄が本土に復帰するまでの間、各種の援護活動を行った特殊法人南方同胞援護会(昭和31年～47年5月)の後を受けて、昭和47年9月20日に設置された内閣府所管の公益法人です。新たに設立した財団法人沖縄協会は、南方同胞援護会の実績と経験を活用して、沖縄の振興施策に積極的に協力し、平和で豊かな沖縄県の建設に寄与してまいりました。平成23年(2011)4月1日、沖縄協会は内閣総理大臣より公益財団法人として認定を受けて「公益財団法人沖縄協会」として新たな一歩を踏み出しました。これからも、沖縄県の健全な発展と幸福な社会形成に役立つ事業を行いながら、沖縄平和祈念堂を管理運営することで、平和で豊かな沖縄県の建設に貢献していきます。

公益財団法人 沖縄協会



「父とわたし」

琉球舞踊 無憂華の会 会主・山田 多津子
むゆうげ

私の父「山田眞山」をインターネットで検索して見てみると

◎山田眞山、一八八五年（明治十八年）十二月二七日～一九七七年（昭和五十二年）二月二九日は、明治から昭和にかけての彫刻家、画家。本名は渡嘉敷兼慎（とかしきけんしん）

と、紹介されていました。ここでは芸術家の部分にも触れながら「父」としての山田眞山のことを書きたいと思います。

私は、父・山田眞山、母・ヒロ子の次女としてこの世に生を受けました。私が5才の時に始まった沖縄戦。父は子ども達を連れて那覇から安全な場所を求めて歩き出します。（安全な場所など無かったでしょうが）父と母は家財道具を持ち、姉が1才にも満たない弟をおんぶしていました。子どもだった私が見た情景は、8ミリフィルムでお祭り会場の人ごみをかき分けて歩いているイメージです。とにかく、人が多く、たくさん

の辺りで私は家族とはぐれてしまったそう。父が1週間ほど探し回ってくれて、私を見つけたそうです。戦争孤児になるところでした。

ヤンバルで住み始めた頃は、父は家族を養うために海水を煮て塩を作り、村の人に食べ物と交換してもらっていたそうです。芸術家もその才能を胸底に押し込め、生き抜くのに必死だった時代です。

その後、石川の収容所に連れて行かれたところで、父の才能が少しずつですが認められてきます。皮肉なことに日本人よりアメリカ人の方が先に、父に芸術家としての復帰の道を見出してくれたようです。何人ものアメリカさんが訪ねてきて話をしていましたが、私たち兄弟は、持つてきてくれるお土産が楽しみでした。とても甘いお菓子の味は今も忘れられません。

父はお土産でもらった食料も収容所の人に分けていました。苦しい時代だからこそ皆で分け合う心は大事だと。父の背中をみて感じました。

しばらくして宜野湾市に住まいを提供してもらいました

が、そこはアメリカ軍が使っていた家屋だったようで、部屋には「Command room」と書かれた木札もあり、外壁には銃弾の痕も無数にありました。デイリー新聞社が発行する新聞にイラストを描く仕事や、沖縄の情景を描く仕事の依頼があったそうです。

山田家の朝の一幕は、家族皆での掃除。男は家の外。女は家の中の掃除と朝食作り。とりわけ門の前の砂利は、竹ぼうきで波の模様を作って道行く人を和ませていました。掃除を終えてやっと朝食です。私たち山田家の食卓は、家族が揃ったらず、父の説教が始まります。

「人はいつかあの月に行けるようになる」

「車は将来、水の中や空中も飛べるようになる」

また

「小指の痛みは全身の痛みであるように、宇宙は即我なり」という理念をととうと話していました。

物もろくにない時代に、想像もつかない事を話す父に、私

ちは目を丸くして聞いていたのです。また、

「いっどこで、誰に見られてもいいように、身なりや姿勢は正しておきなさい。天皇陛下や皇后さまのように立ち振る舞いにも気を配って。いつでも力メラが回っていると意識するようになさい」

これは、胸に残っている言葉の一つで、娘や孫たちにも話しています。

当時、バレエを習っていた私を父が見に来てくれて、「多津子の体型はバレエより琉球舞踊の方が合うから」と琉舞の門を開いてくれたのは父でした。本当はバレエが好きでしたが、先見の明がある父の言う事だからなのか、運命だったからなのか、素直にこの世界に足を踏み入れることになりました。父の「身なりや姿勢を正しく。立ち振る舞いにも気を配りなさい」の言葉は、人前に出る機会が多くなった私には何よりも教訓になる言葉になりました。

父が沖縄平和祈念像の原型制作に取り掛かったのが七十二歳

の時。毎朝の掃除を終えて身なりも整え、白衣に着替えてから像の制作に向かうのが父の日課でした。気力と体力の衰え。制作費用などの心配から、周囲の反対もありましたが、父のやる気、使命感は誰も止めることができませんでした。高さ12メートルの像から転落すること

2回。琉球漆喰で固めた原型が出来上がりました。その後、残念ながら未完成のまま父は亡くなりましたが、志を同じくする有志の方々のおかげで、平和祈念像は完成されました。

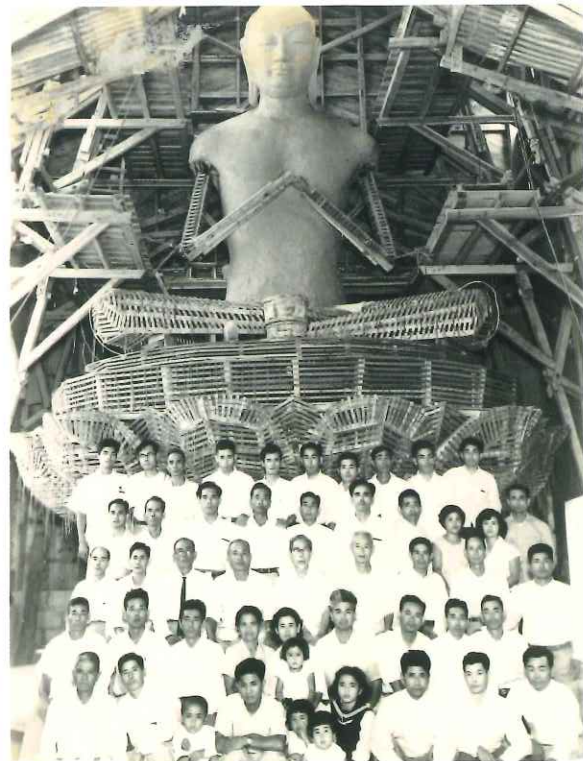
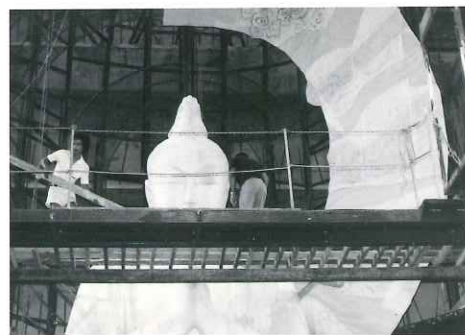
物を形としてつくる芸術的な面は、私には受け継がれませんでした。父が導いてくれた琉球舞踊の世界は今年で六十六年目になります。私には一生のものになりました。沖縄・日本・世界の平和を祈りながら像を制作した父。その背中を見て育ったわたし。私が出来たことは琉球舞踊を通して平和の尊さ、平和の有難さ、戦争の愚かさを伝えていくこと。

それが、わたしが父から受け継いだ心です。

【写真館】沖縄平和祈念像原型制作過程



山田真山先生が沖縄平和祈念像原型制作に取り組んでいる姿を紹介します。



★沖縄平和祈念堂前室にて

写真展開催

本年度も開催を予定していた「こどもまつり」「レクイエムコンサート」「沖縄全戦没者追悼式前夜祭」は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため中止となった。

各行事の雰囲気を感じていただくと、これまで開催した各行事の写真の中から抜粋し、沖縄平和祈念堂前室にて写真展を行った。

★2020年度 奨学支援生の決定

7月、当協会が実施している「沖縄青少年奨学支援事業（6月30日応募締切）」の審査委員会決議を書面により行った。

厳正慎重な審査の結果、2人を新規の奨学支援生にすることを決定した。本年度の奨学支援生は前年度からの継続者5人を加え、合計7人。一人あたり年額60,000円の奨学支援金が給付される。昭和49年に始まった本事業は令和元年度末までに延べ1,146人の沖縄青少年に支援を行い、509人が卒業し習得した資格や技術を活かして幅広い分野で活躍している。

★高良義雄基金の増額

8月4日、奨学支援金「高良義雄基金」を設置している高良義雄さんから指定寄付として100,000円が寄せられた。これにより「高良義雄基金」は3,800,000円となり、「働しながら学ぶ沖縄青少年支援基金」の総額は67,813,000円となった。

★第29回金城芳子基金

募集案内

『金城芳子基金』は、沖縄女性の地位向上のために献身された金城芳子さん（1902-1991）の強い意志により、そのご遺族によつて1992年に当協会に設置され、沖縄女性の女性のため、社会的に意義のある活動や調査研究を行う個人及び団体グループに助成している。

第28回までに28の個人・団体に助成を実施した。第29回の応募締切は2021年3月31日。当日消印有効。

※詳細は「公益財団法人沖縄協会のホームページより

トピックス

★「国際平和デーに全国で平和を祈る鐘打式」への参加

9月21日の国際平和デーにあたり、全国各地で鐘等を鳴らし、世界の平和と世界の連帯を祈念する式典が開催され、沖縄平和祈念堂も鐘打式へ参加する運びとなった。

正午になり、世界平和を祈り不戦を誓う思いを込めて、新垣昌頼沖縄協会専務理事が「平和の鐘を力強く打ち鳴らした。



★沖縄平和祈念堂改修工事に伴うご寄付のお願い

開堂から42年を迎える沖縄平和祈念堂では、現在、経年劣化による改修工事を頻繁に実施しております。今後、さらに工事の必要が考えられますので、多くの皆様に諸経費に対するご寄付を賜りますようお願い申し上げます。

沖縄平和祈念堂美術館

沖縄出身画家紹介⑥

大嶺 政敏・作 Seibin Omine
回想する守護神 F150

制作意図

沖縄戦で亡くなられた多くの人達のご冥福を祈りながら描き続けました。

大嶺政敏(明治43年生・沖縄県)

沖縄師範学校卒。二科展入選、白日会船岡賞、春陽会賞、毎日連合展(毎日新聞社主催)出品。春陽会会員。平成6年没。

